

平成四年三月建立

万葉歌碑

～ 浅羽平野を詠んだ歌 ～

静岡県 浅羽町

紅之

淺葉乃野良尔

苜草乃

束之間毛

吾忘渚菜

孝書

揮毫者のプロフィール

犬養 孝先生

現在

大阪大学名誉教授

甲南女子大学名誉教授

飛鳥保存財団理事

飛鳥古京を守る会副会長

文学博士

明治四十一年(一九〇七年)

東京都に生まれる。

昭和七年(一九三二年)

東京帝国大学(東京大学)文学部卒業。

その後、神奈川県立第一中学校、台北高校(旧制)、大阪高校教授を経て、大阪大学教授に就任。

文学博士

昭和三十七年(一九六二年)

大阪文化賞受賞

昭和四十二年(一九六七年)

勲三等旭日中綬章

昭和五十三年(一九七八年)

宮中歌会始召人に召さる。

昭和五十四年(一九七九年)

同年、天皇陛下飛鳥行幸に際し、明日香古京を御案内、甘樫丘にて万葉集の御進講。

昭和六十二年(一九八七年)

文化功労者となる。

文化功労者としての業績

永年にわたって万葉集の研究に携わり、歌人の心情の動きをとらえて精細な解釈をほどこし、その舞台となった風土を研究する新分野を開拓した。文学遺跡の保存と古典の普及にも多大の寄与をした。

現住所 兵庫県西宮市今津山中町八一三三三号

紅の浅葉の野良に刈る草の

束の間も吾を忘らすな

作者不詳（卷十一ニ七六三）

万葉集は、今から千三百年ほど前の日本最古の歌集で全二十巻 四千五百余首から成り作者は天皇から無名の民衆まで幅広い階層の人たちです。

この歌は「浅羽の野良で草を刈る、その束の間もわたしのことを忘れないで……」という相聞歌で若者の純情一途な思いがそのまま伝わってくる青春の歌です。

平成四年三月 建立

浅羽町・浅羽町文化協会

揮毫

文化功労者・文学博士
大阪大学名誉教授

犬養 孝

万葉歌碑の概要

所在地	静岡県磐田郡浅羽町浅名九七六 浅羽町立図書館敷地内
建立	浅羽町・浅羽町文化協会
揮毫	文化功労者・文学博士 大阪大学名誉教授 犬養 孝
解説文	（考案） 浅羽町文化財保護審議会委員・柴田静夫 （揮毫） 浅羽町教育長・岡本幸夫
使用石材	根府川石（輝石安山岩）
施工	静岡県磐田郡浅羽町諸井一〇三五―七 株式会社 石亀 石材店
事業費	二五七万五〇〇〇円
建立日	平成四年三月三日



カルカヤ

浅羽ゆかりの万葉歌

くれない あさば
紅の浅葉の野らに 刈る草の
つか あだ あ
束の間も 吾を忘らすな (11-2763)

〔大意〕 浅羽の野らで刈るかやのその束の間も私のことを忘れないでください。

あさば の
浅葉野に 立ち神さぶる 菅の根の
ねもころ誰ゆえ あが恋なくに (12-2863)

〔大意〕 浅羽の野にもものさびて生えている菅の根のねもころにはかの誰もわたしは恋しいと思いません。

ときとき
時時の 花は咲けども 何すれそ
母とふ花の 咲き出来ずけむ (20-4323)

〔大意〕 四季折々の花は咲くのになんとして母という花は咲き出さなかったのだろうか。

しる は にえ
遠江 白羽の磯と 贄の浦と
あひてしあれば 言も通はむ (20-4324)

〔大意〕 遠江の白羽の磯と贄の浦とがくっついていたら便りもなろうに。

